

令和3年度 卒業生満足度調査結果報告書

〔 群馬医療福祉大学 〕

本調査は毎年実施している「在学生満足度調査」から、令和3年度に実施した卒業見込みの4年生（対象241人、回答210人、回答率87.1%）にかかる調査結果を抽出して報告するものである。

分析にあたっては主な質問事項において「満足していた」と「どちらかという満足していた」を「満足グループ」、「不満であった」と「どちらかという不満であった」を「不満グループ」とし「どちらともいえない」を加えた3分類として比較検討する（項目によっては5分類の場合もある）。

問1 入学決定時の気持であるが「満足」は73%、「不満」は7%となっており、昨年度と比較して満足の割合が3%減少し、不満の割合が横這い状態である。

問2 教育理念について知ったのは「入学前から」は62%、「入学後」は36%となっており、昨年度とほぼ同様の結果を得られた。すなわち、オープンキャンパス・広報活動、出前授業などによって本学の教育理念が浸透し、また入学後のフレッシュャーズキャンプなどによってほとんどの学生が理解していることが読み取れる。「今回初めて知った」が昨年度と同様の2%となっており、ある程度本学の教育理念が浸透していることが窺える。

問3 教育目標についても問2と同程度の水準97%理解しているが、今回初めて知ったという者も、昨年度と比べて1%減少の3%となったが、しかし僅かながら存在している。年々改善されているものの、在学期間中の理解促進を今後も図っていく必要がある。

問4 次に、「教育理念」や「教育目標」を感じる機会としては、2020年度は「講義を受けている時」や「単位認定をされるボランティアを行っている時」が上位を占めていた。2021年度は「講義を受けている時」29%の他に、「実験・実習に取り組んでいる時」が13%と他の質問項目より、実感できる機会が多いと回答する4年生が増えている。これは2020年に発生した新型コロナウイルスの影響により、軒並み実習が中止となった経験を経たために、2021年の実習経験をより貴重に感じたための上昇であろう。

問5 教育に関する取り組みの満足度は「基礎教育」「専門教育」、「情報教育」、「総合演習・卒論指導」「基礎演習」、「クラス担任制」など、調査内容のほとんどにおいて、満足と回答した者が70%を超えている。昨年度は「キャリア支援・就職支援プログラム」20%、

「資格取得対策講座」14%と大幅に減少した二つの項目については、それぞれ70%、71%と70%代に回復している。新型コロナウイルスにより対面指導の代替えとして遠隔操作システムによる指導の徹底や、規制緩和によるものと考えられる。昨年度の課題であった「コロナ禍における親身な相談・指導の構築」は、ひとまず構築できたと考えられる。

問6 学生が何に意欲的に取り組んできたかの問いには、「専門的な知識を身につける」と「幅広い教養を身につける」を選んだ学生が多く、次いで「資格取得の対策を行うこと」が続いている。「外国語を身につけること」を選んだ学生は少なく、この傾向は昨年度同様である。

問7 受講してきた授業での不満についての問いには、「不満な授業はない」が最も多く、これはアンケート開始以来、首位を保っている。しかし「教員の一方的な授業」の回答者が昨年度よりも増えて最多となり、昨年度最多を占めた「授業内容に興味が持てないから」が次点となっている。原因として、対面での授業形式が回復したために、かえって遠隔操作時での講義と比べ、準備が粗雑になったのではないかと推測される。

問8 昨年度とほぼ同様の結果であるが、「専門分野が充実している」では初めて80%代となった。また「基礎・教養分野が充実している」「演習・卒論指導」「実験・実習に十分な時間が確保されている」では70%を超える微増となっている。しかし「高校で学んできたこととの結びつきがわかる授業が多い」については41%と昨年度比べ7%の微増だが、やはり低水準である。本校の特徴である資格取得にかかる専門科目が多いためでもあり、やむを得ない一面もある。一方で「外国語教育が充実している」「選択できる授業科目が充実している」の回答割合が、昨年度同様に今年度も微増している。今後もカリキュラムの改善を通じた、魅力のある授業を提供していくことが求められる。

問9 昨年度と同様に、本学の教員に関しては「授業の進め方や指導法をよく工夫している」と「教育指導に熱意を持っている」など大半の設問項目において70%以上の学生が高い評価をしており、昨年度と比べて10%近く上昇している。しかし「授業以外でも教員とコミュニケーションがとりやすい」と回答した学生は、昨年度は62%であったが、今年度は79%まで回復している。対面による人と人との直接の交流が信頼関係の構築に深く影響していることがこのことから窺える。

問10 昨年度と同様に「社会のために行動する力」や「相手の意見を丁寧に聞き内容を正確に理解する力」など、多くの設問に対して医療・福祉を学ぶ学生としての基本的なことを本学で修得できたと学生は認識している。また、「数式や図表を使って表現・

分析する力」や「外国語に関する面」の回答割合が低いことも昨年度同様である。なお、今後さらに身につけたい事項としては「コミュニケーション能力」に関するものが昨年度と同様に多い。一方で「目標の達成に向かって取り組み続ける力」、「周囲の状況に配慮して行動する力」、「社会の規範やルールに従って行動する力」などを挙げた学生が昨年に引き続き増えている。

問11 本学への総合満足度で「入学してよかった」については「満足」は76%と昨年度の63%から13%も上昇し、「満足していない」が昨年度14%から5%と減少している。これは卒業該当学年の本学への満足度が高いことを示している。対面形式による教員と学生の直接の交流や、教員の学生への徹底したサポートが、卒業該当学年の満足度の高さに現れたと考えられる。

問12 所属していた学科への満足度は「満足」が78%で7%の増加、「どちらともいえない」は18%で4%の減少、「不満」は1%でほぼ皆無の状態となっている。「どちらともいえない」層を「満足」に転じることができた。今後とも学生の「どちらともいえない」「不満」をどのようにして「満足」させていくかが課題である。

問13 本学を後輩や妹に進めたいと思うかという設問については「勧めたい」は46%と5%の微増。「どちらともいえない」が37%から9%、「勧めたくない」は22%から7%へと大幅な減少となっている。昨年度と比較して、「勧めたい」が微増し、「勧めたくない」が大幅に減少している。改善の理由としては、やはり対面授業による教員と学生の信頼感の構築が挙げられるのではないだろうか。改善理由を精査することで、今後の教育活動をより一層充実し、学生の満足度を高めていくことが可能と考える。

まとめ

職場や地域社会などで仕事を始めていくことが焦眉の間に迫り、総じて卒業年次の学生は、社会人として習得しておくべき能力について、十分でないと考えていることがアンケートから窺える。経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」（主体性、働きかけ力、実行力）、「考え抜く力」（課題発見力、計画力、創造力）、「チームで働く力」（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）の3つの能力（12の能力要素）から成り立っているが、本学の多くの卒業生は、主体性、実行力、協調性などの社会人基礎力を身につける必要性を痛感しており、これら今年度の結果は昨年度と比較しても、この傾向をよりいっそう強く出ていると言えよう。

2020年度と比較して2021年度の顕著な例として、教員・学生間の「ウィズコロナ禍」にあってどのようにコミュニケーションを図るかが問題であった。遠隔操作の普及や緊急事

態宣言の解除・まん防の解除・緩和化による人的交流の回復が学生の満足度向上に大きく影響されることが見て取れた。今後もどのようにして学生とのコミュニケーションを維持・向上させていくかが継続の課題であり、そのうえで学生の満足度を高めるキーワードとなることが確実視される。

本学社会福祉学部では一昨年度から1年生全員を対象に「サービス・ラーニングⅠ」の科目を開講した。(2021年度は開設3年目)この科目は大学近隣の地域の様々なフィールドにおける課題解決のために取り組み・企画することを通じて、地域社会の様々な実践に触れて、学生自身の学修の深化とコミュニケーション能力・社会性・協調性・行動力といった社会人基礎力を培うことを目的としている。少しずつではあるが、サービス・ラーニングを昨年受講した学生の中から、地域に出向き地域住民と共同して企画・運営をしている者も出てきている。

このことから長期的な視野に立ち、主体性を身に付けていくことが、本学学生の身につけたいと考えている社会人基礎力の強化にも繋がろう。そのためにも教員・学生の協働による授業内容の点検及び検討、学生アンケートから抽出される検討事項の速やかなフィードバックなど、PDCAサイクルを機能させ、今後も教育の質向上に努めていく必要がある。